

# Charles Dickens の後期の小説と高所衝動<sup>ヘーエントリ・ブ</sup>

山崎 勉

( 序 )

Magda Révész-Alexander は『塔の思想：ヨーロッパ文明の鍵』の中で、彼女の父親であり哲学者であった Bernard が、「高所衝動 (ヘーエントリ・ブ)」と名付けた人間の精神の作用に言及している。彼女に依れば、高所衝動とは、「人間の本性と肉体の有限性によって当然おこってくる障害」を克服しようとする、「純粋な精神力」のことであり、「いやがうえにも高く、ついには見ただけで目まいがするほどの塔をつくりたいという情熱」と関係する、「きわめて精神的な原理」(36)である。

Charles Dickens の後期の小説に登場する主要な人物達の多くは、程度の差こそあれ、各自の抱える事情を因とする高所衝動に駆られている。Dickens は幾つかのイメージを駆使して彼等のその衝動を表現することに努めた。本稿の目的は、彼の努力の軌跡を辿るとともに、その高所衝動のイメージの質を検証することである。

本論に入る前に、1850年代の半ば頃の Dickens の心理的状況を示唆する、彼の実生活における一つのエピソードを紹介しておきたい。自宅 Tavistock House の居間を劇場替わりにして素人演劇 (Wilkie Collins 作の *The Lighthouse*) の公演を企画した Dickens は、懇意にしていた画家 Clarkson Stanfield にその劇の背景(灯台の内部)を描いてくれるよう、1855年5月22日付の書簡で依頼している (*Letters* 7: 627 &n)<sup>1</sup>。Stanfield は Dickens のその要望に応ずるとともに、逆巻く大波に取り囲まれた灯台(その劇の舞台として設定されている Eddystone Lighthouse がモデル)をモチーフにした道具幕(アクトドロップ)をも作成した。当の書簡で Dickens がそのような構図の絵に対する好みを記したことが、Stan-

fieldの彼へのこうしたサピスを生み出したのである。Dickensは素人演劇終了後、気に入ったその道具幕をその後購入したGad's Hill Placeのホールに展示したそうである(Letters 7: 627n; Forster 3: 50n)。LondonのDickens House MuseumのMary Hogarthの部屋の壁に展示してある(少なくとも、1983年の時点ではその部屋に展示してあった)その道具幕と出会い、そこに描かれた灯台にDickensの孤高の姿を垣間見て、一瞬息を呑むとともに、歩を止めた数多くの人々がいるのではないだろうか。

*The Lighthouse*の本格的な準備開始から上演終了までの期間(1855年5月下旬から同年7月中旬)<sup>2</sup>は、Dickensの*Little Dorrit*の第1分冊の執筆時期と重なっている。この小説がMrs. Clennamの閉ざされた部屋、監獄、Circumlocution Office等々の迷宮的イメージで氾濫していることと、その執筆開始時に彼が示した、嵐の中で抵抗と挑戦の意志を表すかのように屹立する灯台の絵への関心との間には、明らかに繋がりがある。というのは、*Little Dorrit*についての拙稿で既に指摘したように(「迷宮への意識」74-77)、己れを取り巻く状況の閉塞性と沈滞というものを感得していた当時の彼は、孤立感を強めていたし、さらに悪いことに、彼は自分自身の生の裡にも閉塞性と沈滞、そして、大きな空白をも見出していたからである。Stanfieldの描いた灯台の前に立った時、Dickensは自らの孤立感、そして、そののっぴきならぬ内的状況からの脱却への、自らの希求を体現するものを見る思いがしたに違いない。

上述の*Little Dorrit*執筆開始時における、Dickensの生の裡の大きな空白を端的に物語っているのが、同小説執筆直前の1855年2月4日(推定)付のJohn Forster宛の書簡中の文言である(Letters 7: 523)。その文言の主旨は、気が滅入った時などに、それまでの「人生において捉えそこねた一つの幸福」(“one happiness [he has] missed in life”)、あるいは、「得ることのなかった一人の友であり伴侶である者」(“one friend and companion [he has] never made”)についての圧倒するような思いが、彼を襲

ってくるというものである。このことや3年後の妻 Catherine との別居、そして、*David Copperfield* (1849年3月から1850年10月にかけて執筆)において、主人公 David の「子供妻」(“child-wife,” 643 et passim)Dora を介した、Catherine いじめが既になされていたことを考慮に入れると(山崎, 「Dora と Micawber」 238-41)、1850年代半ば(つまり、40歳代前半)の Dickens の心の中の空白は、彼の家庭生活と密接な関わりを持つものと捉えて良さそうである。

( 1 )

ところで、上述した Dickens による Catherine いじめの一環として捉え得るのが、*David Copperfield* の44章における Dora との結婚生活に「空虚さ」(“void”)を痛感する David の姿である(646)。David は Dora が「子供妻」でなく、自分を向上させてくれる「相談相手」(“counselor”)となるような、「より強い人格と決断力」(“more character and purpose”)の持ち主であって欲しいと願うのだが、結局、その願いが叶うことはない。David のその高所衝動の援助者となるのは、Dora の死を看取り、その事実を「天に向かって差し上げられた厳かな手」(“ [the] solemn hand up-raised towards Heaven, ” 768)で彼に告げた、Agnes Wickfield である。再婚相手となった Agnes に対して、自ら (David) が死の床に就いた時も、いつものように傍で「天に向かって指差して」(“pointing upward,” 677 my italics)いて欲しいと、彼は物語の掉尾で祈願さえている。

David の指導者としての Agnes の姿勢を表象する上述の彼女の動作は、Dickens の義妹 Mary Hogarth と関わりがある。というのは、最初のアメリカ訪問の際の大歓迎に喜んだ Dickens が、1842年1月29日[推定]付の Forster 宛の書簡で、夢に現われた Mary Hogarth (1837年5月没)のことに言及し、自分がこのように遇して貰えるのも、「この4年以上の間変わることなく天を指差していてくれた[Mary の] 霊」([Mary's] spirit which . . . has pointed upwards with unchanging finger for more

than four years past” my italics)の存在のおかげだと記しているからだ (*Letters* 3: 35)。この一節は、一足飛びに文壇の寵児となった彼を励まし続けながら天逝した、Mary への彼の謝辞であり、彼女と Agnes を結び付ける解釈を定説化させる一因となったものである。

David よりも悲惨な姿を露呈しているのが、無理解で飲んだくれの悪妻を持つ、*Hard Times*(1854年1月から7月にかけて執筆)の Stephen Blackpool である。Stephen もまた、当の作品執筆時の Dickens の心的状況を投影された人物のようである。彼は自分の置かれた境遇を「泥沼」(“muddle,” 66 et passim)と呼び、そこから這い上がろうとするが、貧者にとっては不公平な法律の故に妻との離婚もままならず、おまけに窃盗の嫌疑をかけられ、遂には、Old Hell Shaft という悪名を冠された、石炭採掘用の立坑に落ち込んでしまう。自分の「泥沼」の中の人生を表象するその地獄の立坑の底で、Stephen は真上にある星を見上げるのだが、その場面が余りにも感傷的に描写されたがために、彼の上昇指向的な視線に読者の注意を惹こうという作者の意図は、計画倒れになっている。

このように、Agnes の天を指差すという動作、そして、Stephen の立坑の底から星を見上げるという行為は、上昇指向的な視線を利用した手法であり、効果という意味ではそれ程感心出来るものではないが、高所衝動の表現方法を模索していた Dickens の初期の実験的手法としては、看過出来ない。因に、*David Copperfield* と同時期に執筆された小品である、“A Child’s Dream of a Star” (*Household Words* の 1850年3月30日号所収)の主人公が星を見上げる視線も、Dickens の実験としてそれなりに見逃せないものである。

( 2 )

*David Copperfield* と *Hard Times* に挟まれる形で発表された *Bleak House* は、いかにも「出口なし」という雰囲気全体に充満した世界を扱っている。その世界を構成するのは、精神的な八方塞がりの状況を想起さ

せる“Dedlock”という名前を持つ人物達、Krookの店の床下の「穴蔵」(“well,” 57)、遅延した裁判で動きの取れなくなった大法院、そして、迷宮そのものであるスラム街 Tom-all-Alone's 等である。この迷宮的世界で女主人公 Esther Summerson が罹る天然痘、そして、回復後の顔面の痕跡は、謎めいた彼女の出自と、それを背景とした彼女の苦渋に満ちた生の表象である。その疫病のために譫妄状態に陥った彼女は、自分が天にも届かんばかりの「巨大な階段」(“colossal staircase,” 488)を、何ものかに阻まれながらも上ってゆく夢を見ている。必死に階段を上ろうとする彼女の姿は、迷宮的世界で自己実現を目指す彼女の生き様を具象化するとともに、その世界からの彼女の脱出願望をも表現している。

Dickens は、*Bleak House* で Esther に上らせた階段を、次作 *Hard Times* では Bounderby 夫人となった Louisa に下らせている。Louisa が下るその階段は、Mrs. Sparsit の想像力が構築した「恥辱と破滅」(“shame and ruin”)に通ずる「大きな階段」(“a mighty Staircase,” 201 et passim)である。この階段は、James Harthouse との関係を深めてゆく Louisa の転落を印すためのものであったが、彼女は最下段に到達する前に改悛している。*Hard Times* の14章と15章の章題が、“Lower and Lower”、そして、“Down”とされていることから察せられるように、Dickens は Mrs. Sparsit の想像する階段を、Esther の夢の中の階段よりもさらに大々的に扱っているのだが、作品のテーマの展開を表象する手法としての効果は、後者の方が冗長な前者よりも数段上回っている。

*Bleak House* と *Hard Times* における階段の機能を統合し、さらに発展させた階段が、*Our Mutual Friend* に登場している。Jenny Wren の「上って来て死になさい」(“Come up and be dead,” 282)という呼びかけに応じた Lizzie Hexam や Riah が憩う、Pubsey and Co.の屋上の庭に通じる階段である。Jenny は、人形の衣裳作りをして飲んだくれの父親を献身的に世話をする、12歳の身体の不自由な少女であり、Lizzie は、Thames 河で溺死体を漁ることを生業としていた父親と死別した後、その生業に纏

わりついた罪悪感を贖おうとしている娘である。Riah という人物は、恩ある人の息子(Fascination Fledgeby)の貪欲な商いに付き合わされてはいるが、運命に虐げられた Jenny の友となるような誠実なユダヤ人である。

その屋上の庭(俊しい花と常緑の植物と煙突とから成る)へと友を誘う上述の Jenny の呼びかけ方から、あるいは、屋上の庭へと階段を上ることが「巡礼」(“pilgrimage,” 279)と比喻されていることから分かるように、その庭で Jenny 等が憩う様子を描いた場面(Book Second 第2章)は超越的であり、「死の中の生」のテーマを謳い上げた *Our Mutual Friend* の中心に置かれた、秀逸な象嵌として輝いている。Jenny 達の屋上の庭への上昇という行為は、Dickens の他の作品には窺われないような形で、「死の中の生」を確信した彼等の高所衝動を表象している。因に、彼等が屋上の庭と阿鼻叫喚の路上との間を行き来することの意味については、以前拙稿で詳述したことがあるので、ここでは繰り返すことを控えたい(「*Mutual Friend: Pubsey*」46-49)。

Jenny の庭へと通ずる階段と一見同質とも思えるもう一つの階段が、*Our Mutual Friend* に登場している。それは Bella Wilfer が、夫(John Harmon)の課した彼女の人間性を測る試練を乗り切った時に上る階段、つまり、本来 John が所有権を持つ Boffin 夫妻の屋敷の階段である(767-68)。Dickens は、花、小鳥、泉、コケ等から成る「飼鳥園」(“aviary”)へと通じるその階段を、Bella の精神的上昇を表象する場として、意図的にそこに置いたものと思われる。この階段は、彼女と John を中心に据えた筋のゴールの背景としては、意味を持つかもしれない。しかし、子供の誕生後も夫が本名も素性も隠し通した末に、彼の課した宿題に合格した妻がこのようなご褒美を貰うという筋は、メロドラマ仕立てであり、その階段を使った手法は、Jenny の庭へと通ずる階段の場合とは違って、高く評価することは出来ない。

*Our Mutual Friend* には、Pubsey and Co.の屋上の俊しい庭という<sup>ラス</sup>in urbeの持つ意味合いを、自然という大きなスケールに移行させた場も

登場している。それは、「人と神との隔たりが余りないかのように見える」(“ as if there was no immensity of space between mankind and Heaven, ” 689)、Thames 河上流の Oxfordshire の境界地方である。前述の Lizzie Hexam、そして、救貧院の手を逃れて独立独歩の道を希求する貧者 Betty Higden が、London からこの地方へと遡行している。彼女達の精神的遍歴と空間的遍歴の結び付きについても先述の拙稿で触れたので(「*Mutual Friend: Pubsey*」 49-53)、ここでは、屋上の庭へと通ずる階段同様に、Thames 河が作中人物達の高所衝動の表現の場となっていることに、注意を喚起するにとどめたい。因に、以前 *Great Expectations* に関する拙稿で指摘したように(「*Great Expectations*」 49-63)、この小説の主人公 Pip の精神的な下降、つまり、虚飾の世界への墮落が、Thames 河を背景とする彼の空間的な下降によって象徴的に再現されている。

( 3 )

筆者が作中人物達の高所衝動の表現の場としてこれまでに挙げたものは、真上に星の見える立坑、天にも届かんとする階段、あるいは、屋上の庭へと通ずる階段、そして、神と人との融合を予感させる美しい自然の景観が上流に控える、Thames 河である。これらのものの特質は、上方に聖なるもの、あるいは、聖なる場が配置されていることである。文化人類学に依れば、未開の人々の共同体では、*axis mundi* (世界の柱)を媒体としてシャーマンが天界と大地とを結び付けていた(Eliade 150)。この初源的な塔と Dickens が案出した高所衝動の場は、同質である。本稿の冒頭で紹介した Stanfield 作の道具幕に描かれた灯台も、塔の一種である光塔との類似性といったことなど想起しなくても、見る者に塔性、即ち、垂直上昇の精神の躍動を感じさせる立派な塔である。Dickens がその道具幕に関心を抱いたのも、それ故のことであつたと推察される。

未完に終わった *The Mystery of Edwin Drood* (1869年10月執筆開始)の冒頭の一節には、塔そのものが登場している。もっとも、その塔

は London の阿片窟での眠りから覚めかけた John Jasper が、現実と幻影の錯綜する混濁した意識の裡に見る、「[Cloisterham の]古い大聖堂の量感のある灰色で四角張った塔」(“ [the] massive grey square tower of [Cloisterham’s] old Cathedral ”)である。しかも、その塔と彼との間には、彼の視界を遮る「錆びた鉄の槍先」(“ [a] spike of rusty iron,” 1)が介在している。この Jasper の「阻まれた塔」のイメージには、「Jenny の屋上の庭」を希求する心の否定、ないしは、放擲という風が纏わり付いている。換言すれば、そのイメージは、のっぴきならぬ内的状況からの脱却の意志を失った人の心から、生まれたもののように思われるのだ。それまで作中人物達の高所衝動を表現することに精進して来た Dickens が、その衝動の典型的な表象 (= 塔) を阻むイメージを持ち出したこと、そして、そのイメージが阿片中毒患者の半覚半醒の裡の幻の塔であることは、意味深長である。

*The Mystery of Edwin Drood* が未完であるために、上述の「阻まれた塔」の表象的意味合いを物語全体の枠組みの中で断定することは、不可能である。しかしながら、John Jasper が神聖な場 (Cloisterham の大聖堂) における聖歌隊長という職にありながら、甥 (Edwin Drood) の許嫁 (Rosa Bud) に偏執的な愛情を威嚇的に押し付ける自己中心的な人物である上に、阿片に毒されるような放縦な人物であるという設定には、その「阻まれた塔」のイメージの意味を知る手掛りが隠されているようだ。つまり、その設定から感得されるそのイメージの意味するところは、高所衝動の実現の場である「聖域」からの彼の「追放」である。Jasper が自らの真情を吐露する場面が、物語の終盤に置かれる予定であったのだが (Forster 3 : 425-26)、もしその場面が執筆されておれば、恐らく、その吐露される事柄の中に、彼なりの高所衝動と挫折、ないしは、進むべき道からの逸脱を見出すことが出来たのではないかと思われる。

Jasper と大聖堂の塔とが結び付けられる場面は、上述の場面だけではない。彼は 12 章で、石工 Durdles を案内人として塔の上部にまで上ってい

る(135-37)。Jasperのこの空間的上昇は、その目的が極めて胡散臭いものであり、高所衝動のなせる業ではないようである。言うなれば、それは、Jenny Wrenに「生へ下りなさい」(“Get down to life,” 281)と宣告された、*Our Mutual Friend*の *Fledgeby*の屋上の庭への侵入に等しいものである。また、Jasperのこの似非上昇には、その場面の直前で触れられている、ランプの灯った彼の部屋のあるゲートハウスが、あたかも、人々の生という「潮流」(“tide”)を背景とする「灯台」(“Lighthouse,” 135)のように見えることと、一脈通じるものがある。何故ならば、その「灯台」は、世間を欺く彼の偽りの姿の比喩に他ならないからである。彼の真の姿を表すには、その「灯台」(塔)は何ものかによって遮られていなければならない。

「阻まれた塔」のイメージが Dickens の小説に登場し、しかもそのイメージが、芸術(即ち、音楽)に携わっている主要な作中人物と結び付けられたことの意味を知るには、*Edwin Drood*の執筆を開始した頃(1869年10月)に、Dickens が置かれていた状況を把握して置く必要がある。前述したように、*Little Dorrit*を執筆していた頃(1855年5月-1857年5月)の彼は、己を蝕む閉塞感と沈滞感、そして、孤立感に圧倒されながらも、否、圧倒されていたからこそ、例の道具幕上の灯台に向けられた彼の関心が物語る、その内的状況からの脱却を希求する積極的な意志を持っていた。*Our Mutual Friend*(1863年末-1865年9月執筆)に登場する Jenny の屋上の庭は、*Little Dorrit*以後もボルテージを上げて行った、彼のそのような意志の結晶とも言えるイメージであった。しかし、*Our Mutual Friend*執筆終了時から数えて4年後の *Edwin Drood*執筆の頃には、妻 Catherine との別居、そして、Ellen Ternan との関係がもたらした家庭の崩壊、Henry 以外の子供達の在り様への失望、多くの友人・知人達の逝去、そして、自らの身体の不調等々といったものから生じた心労が徐々に積み重なり、相乗作用も相俟って、精神的な Dickens もさすがに耐え難さを感じ始めていた筈である。このことが Dickens の精神に与

えていた影響の根深さ故に、作家としての世俗的な名声にも拘わらず、彼の精神的上昇への意気は阻喪されていたと考えられる。

Jasper の「阻まれた塔」のイメージの出自は、上述した Dickens の精神状況に見出すことが出来る。Jasper は反-主人公的な人物ではあるが、Dickens は *The Old Curiosity Shop* の Daniel Quilp に自己を投射したこともある訳で（山崎, 「*Old Curiosity Shop*」 92-95）、その頃よりも数段深まった彼の内省の所産として、Jasper 像に自我像の一部が移入された可能性は十分にある。

#### （ 結び ）

以上、Dickens の後期の小説を対象として、作中人物達の高所衝動のイメージ化の技法とその質について検証した。玉石の両者が混在するとはいうものの、天に向かって指差す行為、天空の星に投げ掛けられる視線、天、あるいは、楽園的空間へと通ずる階段、牧歌的な雰囲気漂う上流域を備えた Thames 河、灯台、そして、塔そのものといったイメージが、高所衝動を表現すべく実験的に使用されている（もっとも、最後の二つは、高所衝動を否定する文脈で使われているのだが）。これらのイメージの裡で最も高い評価をし得るのは、作品（*Our Mutual Friend*）のテーマ（即ち、「死の中の生」と密接に結び付くとともに、構造的に幾つかの同心円からなる物語の核として機能している、Jenny の屋上の庭と路上とを両極とする空間イメージである。

Dickens が創作活動の後半期に示した高所衝動への強い関心は、前述したように、彼自身の内的欲求を明らかに反映している。それは迷宮の世界での孤独を余儀なくされた、ないしは、それに耐える決意をした人間の、孤高への憧れにも似た欲求である。もっとも、彼も生身の人間であるが故に、彼のそうした欲求が全面的に純粋なものである訳にはいかなかった。絶筆となった小説の冒頭に、「阻まれた塔」のイメージを置かざるを得なかったことが、それを証明している。そのイメージを案出した際の彼の内心

に、己の現在の生への極めて苦々しい想いが紛れ込んでいたことは、間違いない。

( 注 )

1. Dickens の書簡集は Pilgrim 版を使用した。括弧内引照をする際には、この書簡集を *Letters* とのみ記す。
2. 尚、この劇は 1857 年に、ブロの劇団によって Olympic Theatre で上演されている (*Letters* 7: 669n)。

参考文献

- Dickens, Charles. *Bleak House*. London: Oxford UP, 1966.
- . “A Child’s Dream of a Star.” *Household Words* 2 (1850): 25-26.
  - . *David Copperfield*. London: Oxford UP, 1966.
  - . *Great Expectations*. London: Oxford UP, 1970.
  - . *Hard Times*. London: Oxford UP, 1970.
  - . *The Letters of Charles Dickens*. The Pilgrim Edition. 11 vols. to date. Oxford: Clarendon, 1965- .
  - . *Little Dorrit*. London: Oxford UP, 1970.
  - . *The Mystery of Edwin Drood*. London: Oxford UP, 1968.
  - . *Our Mutual Friend*. London: Oxford UP, 1967.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 3 vols. London: Chapman, 1872-74.
- Révész-Alexander, Magda. 『塔の思想：ヨロッパ文明の鍵』池井 望 訳 東京：河出書房新社，1972.
- 山崎 勉. 「*David Copperfield*: Dora と Micawber のこと」 『ことばの

- 地平 『英米文学・語学論文集』 梅田倍男編 東京：英宝社、1995.
- ・ 「*Great Expectations* 主人公 Pip の精神と空間における遍歴」  
*Ivy* (名古屋大学英文学会報) 13 (1974): 49-63.
- ・ 「迷宮への意識 *Little Dorrit* 試論」 『アカデミア』 (南山大学紀要 文学・語学編) 28 (1980): 55-78.
- ・ 「*The Old Curiosity Shop: Nell と Quilp と Dickens*」 『アカデミア』 (南山大学紀要 文学・語学編) 48 (1990): 79-103.
- ・ 「*Our Mutual Friend* Pubsey and Co. の屋上の庭」 『アカデミア』 (南山大学紀要 文学・語学編) 23 (1976): 45-63.

